

## 巻頭言

比較文化学科×SDGs× ?

比較文化学科長 伊藤 健人

## 比較文化学科×SDGs×「やさしい日本語」

SDGsと聞くと「比較文化学科には関係ないんじゃないの?」と思うかもしれませんが、SDGsの17の目標には比較文化学科が得意とすることが沢山あります。特に、目標4「教育」、目標10「不平等」の達成には「ことばの壁」や「差別・偏見」を取り除くことが不可欠で、「異文化理解・多様性」を学びの中心にする比較文化学科にはピッタリなのです。さらに、「やさしい日本語」によって、目標3「保健」、目標11「持続可能な都市」、目標16「平和」の解決に貢献することもできます。



質の高い教育を  
みんなに



人や国の不平等を  
なくそう

## 多文化共生社会における言語サービス

日本に住む外国人の数は2019年末には過去最多となりました。外国人が日本で安全に安心して生活するためには、災害や医療などの公的な情報だけでなく、バスや電車、買い物などの日常生活の情報も必要です。多くの自治体は多言語による言語サービスに力を入れていますが、多言語化には限界があるため、母語での言語サービスを受けられない外国人の情報格差が生じています。この格差を埋めるべく「やさしい日本語」がますます注目されています。「やさしい日本語」とは、難しい表現を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです。

## 日本で生活する外国人の約82%は日本語で日常生活程度の会話ができる

「やさしい日本語」の理解には、初級修了程度の日本語能力が必要です。出入国管理庁・文化庁が2020年にまとめた『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』によると、日本語での会話がどの程度できるかについては、約82%が「日常生活程度」の日本語には問題がないと回答しています。また、「希望する情報発信言語」として「やさしい日本語」を選んだ人が76%と最も多く、日本で生活する外国人に「やさしい日本語」が有効であると言えます。

## 「普通の日本語」と「わかりやすい日本語」と「やさしい日本語」

「やさしい日本語」の“やさしさ”とは何でしょうか? 一言で言うと、“やさしさ”とは肉面的な気持ちに関わるものと言えます。もちろん、言語学的な知識や技術も必要ですが、それよりもどうすれば相手に伝わるかを考えることが重要です。A、B、Cの文章を比較してみましょう。

【A：元の文章（普通の日本語）】 新規の上陸の許可を受けて日本に入国した場合

在留カードが交付された方（後日交付となった方を含む。）は、住所を定めた日から14日以内に、在留カード（後日交付となった方はパスポート）をお持ちになってお住まいの市町村において転入の届出をする必要があります。ご家族と一緒に日本で暮らす方については、ご家族の関係（続柄）を証明する文書（本国の政府などの公的機関が発行したもので、婚姻証明書、出生証明書など）が必要となります。

【B：日本人にわかりやすい文章】 新規の上陸許可を受けて日本に入国した場合

- ・住所を定めた日から14日以内に市区町村に転入の届出が必要です。
- ・届出の際は在留カード（後日交付の人はパスポート）を持参してください。
- ・家族と一緒に暮らす場合は、婚姻証明書や出生証明書などの家族関係を証明する公的な文書も必要です。

【C：外国人にもわかりやすい文章＝「やさしい日本語」】 日本の住所が決まったとき

- ・住所が決まってから14日以内に、住所がある町の役所に「転入届」を出します。
- ・役所には、パスポートか「在留カード」を持っていきます。
- ・日本人ではない家族と住む人は、家族の関係がわかる書類も持っています。

元の文（普通の日本語）のAは、必要な情報が漏れなく書かれてはいますが、重要な情報とそうではないものが混在していて、何をどうすれば良いかがわかりにくいですね。そこで、情報を整理して重要な順に読みやすくまとめたものがBです。だいたいわかりやすくなりましたが、Bの「届出の際、後日交付、持参する」などは、初級修了程度の外国人には難しすぎます。これらをやさしく言い換えたものがCの「やさしい日本語」です。

「やさしい日本語」の“やさしさ”

Cは、言語形式的な部分に“やさしさ”が現れていますが、それだけではありません。BとCを比べると、Bの「家族」は「日本人ではない家族」にほぼ限定されます。なぜなら、日本人の家族がいればその人が転入届を出すので、家族の外国人（この文章を読む外国人）の届出も一緒に行う可能性が高く、「家族関係を証明する公的な文書」も用意するからです。従って、そうではない人、つまり、本人も家族も外国人の場合がこの文章のメインターゲットなので、「日本人ではない家族と住む人」と言い換えられています。これが、言語形式を超えた、相手の立場に立った“やさしさ”なのです。

比較文化学科×SDGs×

SDGsの目標4 [教育]、目標10 [不平等]の達成には、「ことばの壁」や「差別・偏見」を取り除くことが不可欠ですが、ことば、文化、宗教などの比較文化学科での学びにより、その課題を解決するアイデアが生まれてくることでしょう。  
〈比較文化学科×SDGs× 〉の  に入れられるものは何でしょうか？ 多文化共生社会の一員として“やさしさ”を持ちながら、学科の友だちや教員とともに考えていきましょう。



# ゼミ連インタビュー

比較文化学科ゼミナール連合の学生諸君が君塚直隆先生と八幡恵一先生の研究室を訪問し、ご専門とされる研究のことや趣味のこと、そして、学生の皆さんへのメッセージなど、色々と尋ねてくれました。

## 君塚先生に聞く

### 1. 学生にお勧めしたい本は何ですか？

教養として国内外の主要な文学作品や思想書なども読んでおいて欲しいとは思いますが。本当は「原語」で読めるのがベストなのでしょうが、それはあまりにも大変ですので、主要な出版社から出ている「文庫版」でお読みいただければと。具体的な作品名はあまりにも膨大となるのでここでは申しあげませんが。あとはみなさん、せっかく関東学院大学の国際文化学部の比較文化学科にお入りになったのですから、専任教員の先生方がお書きになっている書籍や論文もしっかり目を通して、「この先生はこういうことを研究されているのか！」ということもわかっていただきたいですね。合同ゼミや普段の講義でみなさんがお聴きになるのは、先生方の研究のほんの一部に過ぎません。特に自分が所属しているゼミの先生がどのような書籍や論文を書かれているのかさえわかっていないようでは……とってしまうですね。



### 2. 講義を通して学生にどのような知識を身につけてほしいですか？

やはり「比較文化学科」ということもありますし、日本と世界各地との比較から自分たち（日本人）とは何か？という発想をつねに抱けるようになっていただきたいですね。日本に特有の文化もあれば、世界各地とも共通の観念もありますよね。そういった違いや共通性というものはどうして生まれるのか。こうした疑問をつねにもってもらい、ご自分なりの回答がつかめれば、学問というものをより楽しく感じていけるのではないのでしょうか。また、私に限っ

て申し上げますと、たとえば私が担当する「外国史2」は16世紀初頭から20世紀初頭の400年間に「外交」や「国際政治」というものがどのようにヨーロッパで誕生し、さらにそれがどのように世界規模で広がっていったのかを探究しておりますが、こんにちの私たちの世界を築いた様々な文化に触れて、「21世紀の日本に生きる自分」というものも見つけていただければと念じております。

### 3. ステイホーム期間中には、何をしていましたか？

もちろん昨年5月に大学が正式に再開されてからは「オンライン講座」のために、私が担当する講義やゼミの時間帯には自宅のパソコンでmanabaに対応しておりましたよ。ただそれ以前（緊急事態宣言期間中）や、それ以降にも比較的自宅に滞在できる時間も増えましたので、本を一冊書いてしまいました！『悪党たちの大英帝国』（新潮選書）という近現代のイギリス史を彩った7人の「悪党たち（具体的には王様や政治家たちです）」が弱小国だったイング

ランドを大英帝国へと育て上げ、20世紀の二度の世界大戦を乗り切るのに尽力していった姿を描きました。本当は2021年の春頃に出す予定だったのですが、19年度の末から20年度の初めにかけての各種の行事（卒業式や入学式、オリエンテーションなど）も中止になってしまいましたね。自宅でどんどん文献も読み込み、私はもともと執筆の速度も速いものですから（業界では「スピード卿」と呼ばれています！）、あっという間に書いてしまいましたね。しかも昨年

4月からの緊急事態宣言期間中には、都内の大型書店も休業し、アマゾンでも日用品優先となってしまったことから、本が全然出せないなどという状況に出版業

界も陥ったりしまして。それならば出せるうちに出しておいたほうが良いとの新潮社の決断で、昨年8月に刊行してしまいました。

#### 4. 大学生のうちに頑張っておいた方がいい、またはやっておいた方がいいと思うことはありますか？

基本的には、文章力やプレゼン能力を身に付けておくことは大事だと思います。社会に出られてからも、どのような職業に就くにせよ、自分の考えを発表しなければならない場面には必ず遭遇しますのでね。基礎ゼミナールはそのような準備講座にもなりますね。あとは若いうち（体力的に）にしかできないことでは、やはり「旅」でしょうね。コロナ禍が終息したら是非とも国内外を問わず、いろいろとでかけていただきたいですね。さらに「今しか観られない（聴けない）」ものを見ておく（聴いておく）のも大切ですね。具体的には、舞台芸術（音楽・演劇・舞踊など）ですね。美

術や映画はのちになってからも見られますが、コンサートやお芝居などの公演は一度きりのものですよね。好きな歌手や俳優はもとより、普段はあまり鑑賞の機会がない歌舞伎や能、文楽、さらにはバレエ、日本舞踊、宝塚歌劇や吉本新喜劇、落語、漫才（お笑い）などあらゆる分野で「観ておく（聴いておく）」ことは大切だと思います。それはご自身の人生にとっても大切ですし、「自分はあるときのこの舞台を観た」というのは後々になっても大切な宝物になってくれるはずです。芸術系が苦手な場合はスポーツ観戦でもいいと思いますよ。

#### 5. 先生はイギリスにどのような魅力を感じますか？

やはり地理的にはヨーロッパにあるのに、大陸の国々とは少し違う文化があるあたりが、ある意味ではこの日本にも似ているのかもしれない。「島国」という側面からもそれは言えるのかもしれませんが。もちろん日本ともまったく異なる部分は多いですよ。ただし、島国である意味「狭い世界」だからこそこか……人間に対する観察というものが大変に鋭いですね。イギリス人は、大陸のヨーロッパ人以上に「人間に対する飽くなき探究心」が強いのかもしれません。それがこの国を世界有数の伝記大国にしていると同時に、風景画より肖像画に多くの名作を生み出し、シャーロック・ホームズやエルキュール・ポワロ、007（ジェーム

ズ・ボンド）のような人間関係のなかでうごめくミステリー小説やスパイ小説の傑作を数々世に出していった一因になっているように感じます。先にお話した『悪党たちの大英帝国』もそういったイギリスの伝記文化に触発されて書いたものです。これでお料理が美味しければ言うことがないのですが！！イギリスは田園風景も美しいですし、さすがにかつては「七つの海を支配する大英帝国」と呼ばれただけあって、イギリス文化全体にある種の「度量（懐：ふところ）の大きさ」のようなものも感じます。そのあたりに魅力を感じたのかもしれない。

## 八幡先生に聞く

### 1. 数ある国の中で、なぜフランスの研究をしようと思ったのですか。

ひとつは、大学の第二外国語でフランス語を選択したからですね。フランス語を選択した理由は本当になんとなくでしたが、一年生のときに「オイディプス王」が教材のフランス語の授業があり、物語が面白くて勉強することが苦ではなかったです。友人たちと週に一回、フランス語の勉強会をしていました。

もうひとつは、フランスの思想に興味をもったからです。こちらは難しかったのですが、難しいからこそ解き明かしてやろう、というような気持ちで勉強していました。やはり友人たちといっしょに思想家の本を読む読書会をしていましたね。



## 2. 最近没頭しているものや、趣味について教えてください。

昔は下手の横好きながら留学中に覚えたテニスをしていたのですが、最近ではコロナ禍もあって難しく、かわりに靴に興味をもって、靴に関する本を読んだり、実際にちょっといい革靴を買って磨いたりしています。靴磨きは楽しいですね。色々なクリームを使って磨いた靴が光沢を放ち始めると、なんともいえないいい気

分になります。また靴は文化や歴史、伝統、テクノロジーに関係するものなので、靴に関する本を読むことも楽しいです。

休みの日にはテレビゲームもしますよ。最近ではサブノーティカというゲームをしていました。

## 3. 先生が大学生活で積極的にやるべきだと思うこと、学生に求めることを教えてください。

べつのところにも書いたのですが、なんであれ色々なものにふれることですね。ゼミでは学生に本や新聞を読むことを勧めて（というか強制して）おり、それに加えて、できるだけいまのうちに、多くの友人をつ

くって、多くの場所にでかけてほしいと思います（いまはコロナ禍で少し難しいですが）。大人になってからの生活を豊かにするのは、学生時代にどれだけ自分の世界を広げられたかにかかっていると思います。

## 4. 先生が取り組んできた研究で印象に残っているものと、現在進めている研究について教えてください。

私はフランスの思想を研究しており、これは内容としてはやはり非常に難しいのですが、しかしそれを知っていると、ものごとの見方や考え方が違ってくると思っています。自分にとってあまりに大きすぎる問題に出会ったとき、それを自分なりに考える、あるいは料理する枠組みや道具として思想が必要であり、そういう風に学生には教えています。それで、私がいま研究しているフランスのある思想家（ミシェル・フーコーという人です）が、自分の書く本について、それを色々なところにつくられている壁を壊す爆薬のように使ってほしいと言っており、これが（研究というよりひとつの言葉ですが）印象に残っています。思想は

小難しい理論ではなく、壁（というのはつまり常識や固定観念のことですが）を崩す道具であり爆薬であるということを読んでほしいですね。

いまはその同じ思想家について、とくに「知」の理論を研究しています。私たちの社会で、知はどのように扱われ、どのような役割を果たしているのか、その思想家が「測定」、「調査」、「検査」という、古代から現代にいたる三つの知（正確には知と権力）の形態を論じているところを分析して、研究しています。とくに調査や検査はいまの私たちの社会でも大きい問題ですから、なにかしらみなさんが読んで興味深いと思うものを明らかにできないか考えています。

## 5. 先生が、大学の教員を目指すようになったきっかけについて教えてください。

ネクタイをしたくなかったから、というのは半分冗談ですが、やはり服装が（比較的）自由というのは実は大きかったです。本を読むが好きだったり、知的な職業に憧れていたという理由もちろんありますが、

毎日スーツを着て革靴を履いて職場に通うことがちょっと嫌だと思っていました。もっとも、いまはむしろ革靴が大好きです。

## 6. 先生が感じる国際文化学部の雰囲気について教えてください。

あえてネガティブなことをいうと、学生がのんびりしすぎているですね。大人しく素直であるといえば聞こえはいいですが、もっと貪欲に知識を吸収したり、なにごとにつけてガツガツしてほしいと思います。そのためには、明確な目標を早い段階で定める必要があり、また大学で身につけたものが実際に役に立ったと実感する瞬間が学生のうちにあるべきだと思うのですが、このあたりは大学や教員が手伝わなければならないで

しょうね。それから、強力なリーダーシップをとって学生をまとめあげ、授業をあまりに早くきりあげる教員やいい加減な授業をしている教員を戒めたり、大学の抱える問題を鋭く指摘したり、さらにその問題の解決を提案したりするような者が出てこないかなと思っています。そういう学生がひとりでもいれば、学部や学科全体の雰囲気がだいぶ変わるのではないのでしょうか。

# 教育実習体験記

比較文化学科では、中学社会・高校地理歴史・高校公民の教員免許状をとることができます。教員免許状をとるためには4年生のときに中学校・高校で教育実習を行う必要があります。その教育実習の様子について、学生に聞いてみました。  
(本学科教員 西尾 知己)

## 4年 G. K.

私は母校の中学校で3週間にわたり教育実習を行いました。担当した学年は2年生で、歴史の授業をすることになりました。初めの4日間は授業見学を中心に行い、1週目の金曜日から授業実習が開始されました。

最初に行った授業は、何とか時間内に終わるのが精いっぱい、手ごたえが全くなく、悔しい思いをしました。板書のスピードが速く、ノートが遅れている生徒への配慮に欠けてしまったこと、生徒の意見や質問に対して自分の知識不足と引き出しの無さが原因で上手に答えられなかったこと、一方的な説明になってしまったこと、授業中の指示出しが足りず生徒を退屈にさせてしまったことなどが主な問題点でした。担当した教科書の範囲は教育実習が始まる前に事前に勉強しており、ノート作りも終えた状態で実習に挑みましたが、教科書には載っていない知識やそれに関連した社会事象を調べ、生徒たちの意見を上げられるよう引き出しをたくさん持って行けると良かったと、今は思います。

実習中は生徒との信頼関係を築くためにできる限り彼らと関わり、休み時間に一緒に校庭に遊びに出たり、放課後は部活動見学に行き一緒にスポーツをしたりしました。私は中学校での実習だったので、2019年から必修科目となった道徳も担当することになりました。道徳の教科書もありましたが、せっかくなら大学で学んだことや中学生に向けて伝えたいことなど、自分の経験を基に教材を作るのが良いのではないかと、指導教諭から提案を受け、担当するクラスのクラス目標が「十人十色」であったため、それにちなんで『個性とは何か』という授業テーマを定めました。道徳については模擬授業の経験もありませんでしたし、実際の学校現場にいる先生方も必修科目になって間もないため手探りといった様子でしたが、学習指導要領や先生方の授業を見るなどして、なんとか形にすることができました。

とにかく必死に走りぬいた3週間であり、実習生は私1人だったので終始不安な気持ちでしたが、学年関係なく先生方や生徒さんが親切にしてくださり、多くの人の支えがあって無事に教育実習を終えることができました。最終日に生徒から色紙や手紙、手作りのミサンガをもらった時はとても嬉しかったですし、きちんとやりきれたのだとほっとしました。現場にいる先生方が子どもを第一に考え、決して生徒を見捨てない姿を間近に見て、自分もそんな風になりたいと強く感じました。

最後に、教職履修者は取得しなければならない単位数も多く、他の授業との兼ね合いもなかなか大変だと思います。教職課程をここまで終えた今、他の教職履修者とコミュニケーションをよく取り、支え合うことがとても大切だと感じています。教員免許取得に励んでいる皆さんを応援します。頑張ってください。

## 4年 T. Y.

私は6月7日から25日までの3週間で母校の高校に教育実習に行ってきました。実習前は自分が生徒に授業をしている想像がつかず、不安と緊張でいっぱいでしたが、終わって振り返ってみるとあっという間で、貴重な経験ができたと感じています。

1週目は、授業実習はなく、先生方の授業見学をさせていただき、2週目から授業実習を行いました。3週目には研究授業と呼ばれる学校内の多くの先生が見に来てくださる授業があり、実習の集大成の場となります。

私は高校2年生に世界史A（フランス革命のあたり）を教えることが事前に知らされていて、ホームルームを担当するクラスも2年生でした。教育実習では指導教諭と呼ばれる実習生一人ひとりについてくださる先生がいて、実習中に授業についてや生徒との関わり方など、様々なことについて相談したり指導をしていただいたりします。多くの場合、自分の指導教諭が教えている学年やクラス、科目などを実習期間中に授業するということとなります。

授業実習が始まってからは、できる限り指導教諭の授業のやり方を真似しようと思いました。学校には電子黒板やタブレットなどありましたが、私の指導教諭は「板書して説明する」を基本にしていて、補助的に資料などを大きく映す際に電子黒板を利用していました。そのため、私は核となる板書のノートをつくり、左ページには板書、右ページにはその出来事の流れや背景をメモし、言わばツッコミポイントを書き留めました。そのノートを指導教諭と相談しながらブラッシュアップしていき、授業実習では板書と資料集を主として授業を進めました。

さらに、科目の授業だけではなくホームルームも担当し連絡事項を伝えたり、総合の授業で進路について考える時間を生徒たちと一緒に悩んだりもしました。私自身、生徒たちとは上手く接することができなかつたと反省していたのですが、最終日には「先生が担任の先生になってほしいです」と言われたり、「先生を見て先生になりたいと思いました」という手紙をもらったり、と本当に嬉しかったです。

私は実習を通して免許だけ取得したいと思っていたのですが、社会人を経験したのち一生懸命勉強して先生になりたいと思いました。教育実習という場は教職課程をとっていなければ経験できないため、実習を経験し自分がどうなりたいか考えるのも良いと思います。



# インターンシップ事前指導を受けて

今年度春学期に「KGU インターンシップⅠ（事前指導）」という講座が開講されました。就職活動において企業の実施するインターンシップの重要性が増すなか、主にこれから就活を始めようという3年生を対象として、インターンシップに望む心構えや必要とされる準備の指導がなされました。これに参加した学生2名が受講記を執筆してくれました。3年生だけでなく、いずれは就活に臨む下級生の皆さんにも参考になるのではないのでしょうか。

（本学科教員 小滝 陽）

## 3年 S. T.

私が、KGU インターンシップの事前指導に参加しようと考えたのは、率直に言って、就職活動をどのように行えばいいのか、よく分からなかったからである。結果から言えば、講義を受けることで就職活動に対する不安は和らいだ。この授業では就職活動の基本を学ぶことになったが、以下で、その内容を簡単に紹介しつつ、私が感じたことを書いてみたい。

最初に行われたのは、「自己分析」だった。自己分析は就職先を選ぶうえで必須の作業である。自分の長所や短所を見つけることで、自分にあった職種を見つけることが出来る。自己分析のために、自分の生活を振り返ったり、昔から付き合いのある友達に自分の性格を聞くといったことも行う。そうした中で、私は人と話すことが好きで、営業やサービス業に向いているのだなど、わかってきた。

次に、「企業研究」に取り組んだ。企業研究を通して、普段、生活しているだけではあまり接することのない業種を知ることができ、視野が広がる。実際、私は当初、旅行業界に絞って企業を調べていたのが、授業のおかげで、交通関係の業界も視野に入ってきた。

少し話はそれるが、私は春学期中に交通関係の企業のインターンシップに参加した。そこで現代の交通業界が社会の中で果たす役割や、直面する課題を知ることが出来た。また、私がインターンシップに参加した企業は交通以外の分野にも力を入れて、暮らしやすい世の中を作り出すために色々な事業を展開していた。インターンシップ参加者も、よりよい世の中につながるような事業企画案を作成するように求められたりした。これなども、KGUインターンシップ（事前指導）を受講したからこそ、得られた経験であろう。

授業では、その後、「エントリーシート（ES）の書き方」について学んだ。ESには、例えば、大学生活で力を入れてきたことなどを書くことになる。しかし、漠然とエピソードを書き連ねればよいのではなく、自分の経験と特定の企業への志望理由を、どんな風に結び付けることが出来るのか考えねばならない。ここでも、「自己分析」や「企業研究」の重要性を痛感することになる。

そして、最後に行われたのが「内定者座談会」である。ここでは、すでに内定を受けている先輩からお話を伺う機会を得た。先金融機関に内定が決まっている先輩は、面接対策を早くから始めることが大切だと話していた。また、2年生の時に業界を決めていたという先輩やインターンなどに多く参加したと話す先輩もいた。こうしたお話から、面接練習やインターンへの参加など、就職活動の準備に早く取り掛かることの大切さを感じた。

KGU インターンシップでは、上記で挙げたもの以外にもグループ・ディスカッション、ビジネス・マナー、服装など、就職活動をする上で大切なことが学べる。私は、今、この授業を履修して本当によかったと感じている。

## 3年 T. TH

私は高校時代にインターンシップは何度か参加したことがあった。大学で行っているインターンシップも同じだと思いき、インターンシップの事前指導は必要ないと思っていた。しかし、全14回の授業のなかに就職の際に必要な筆記試験対策や面接対策があるということだったので、KGU インターンシップの事前指導に参加してみることにした。

この事前指導では面接対策のほか、準備段階に必要な自己分析、企業の見方や選び方、履歴書やエントリーシートの作り方まで勉強できるので、日本語に不安がある私にとってはとてもありがたい内容だった。自己分析について、まだ自分の長所や短所をわかっていなくても授業内では最初から教えてくれるし、自身はどんな業界に合うかその調べ方も教えてくれる。どこから何をすればいいのか迷っていた私には重要な第一歩である。インターンシップに参加するときの最低限のマナーや、就職先によっては筆記試験もあるので、その対策や面接対策までを教えてくれる。また、二回ほど企業の方々を招いて会社説明をしてくれたので、少しは実際の説明会を体験できたかと思う。

半年間にわたって、たくさんのことをKGU インターンシップで学んだが、正直、未だに自分は何をしたいのか、どんな業界に入りたいのかはわかっていない。周りは新学期が始まった途端にインターンシップや就職の準備を始め、夏休み期間中には長期のインターンシップも決まっていた、いろいろ準備していた。それなのに、自分は事前指導の授業を受講すること以外に何もしていない。焦りながらも、遅れているけどエントリーが簡単で自宅からも参加できるワンデーのインターンシップに参加することにした。コロナ禍で各企業は参加人数を大幅に減らしたり、全てリモートで開催したり、例年とは違う形で開催されたインターンシップである。しかし、ワンデーのインターンシップだけでも参加することで、この授業を受講した後に自分から行動する勇気をもらえた最初の一步だったと思う。この授業の単位取得の条件にはならないが、ワンデーインターンシップは気軽に短時間で企業の話聞けるし、そこに就職できた先輩方のお話も聞くことができるいい機会だと感じた。

授業で学んだことを今、全てやりきる必要はないと思うし、今後のための授業だから今は焦らず少しずつ準備していけば大丈夫かと思う。以上はこの授業を通じて感じたことである。何から始めればいいのかわからない人にはKGU インターンシップを受講するのも一つの選択肢だと思う。この授業を受講すれば少しずつ就職に向けて自分なりに準備を始めることができるので。



# 集中講義「外から見た日本」

本学科教員 鄧 捷

集中講義「外から見た日本Ⅰ」はオリンピック開催中の8月2日～6日にオンラインの形式で開催されました。講師は日本国内在住の中国人研究者、東京大学特任講師の王俊文先生です。受講生は21名でした。

私と王先生は学生時代の同窓でしたので、授業の様子を詳細に教えてもらうことができました。

授業は主に三つの部分にわたって展開しました。まず外国人による代表的な日本論、例えばアメリカ学者の『菊と刀』、韓国学者の『「縮み」志向の日本人』などの紹介です。次は外国語としての日本語の特徴を紹介し、受講生に日本語と自身学習中の第二外国語との違いについて比較させました。さらに、外国映画・ドラマ・文学作品の中の日本人イメージについて東京大学刈間文俊先生の講演「変わる中国人の日本認識」を視聴させ、受講生に欧米などの作品に描かれた日本人像を議論させた上、中国人から見た日本という視点に絞って、中国史の中の日本、近現代の中国人による日本論を紹介しました。授業では積極的に学生の発言や討論を促すため、王先生は毎日課題を出して受講生に300字のコメントを提出させ、翌日の授業でフィードバックを行いました。王先生のご好意により、課題と、学生のコメントと先生の解説の一部を拝見することができました。大変興味深かったので、以下で期日に沿ってその一端を紹介します。

## 8.02課題：海外メディアの東京オリンピックに対する報道について、一つ取り上げて紹介してから自分の（海外報道に対する）感想も述べなさい。

受講生はワクチン接種率が低い中での開催に対する懸念を伝える報道、「喪失と悲しみのテーマを導く」開幕式に対する前向きな捉え方をした報道、組織員会の不祥事を批判する報道、ハーフの選手が旗手や聖火リレーの最終走者を務めることに触れ、日本社会の多様性を評価する報道などを取り上げた。オリンピックという国際的な「目」を通して日本社会の良い所と悪い所がはっきりと映しだされたことに驚きを隠せず、例えば、「純血主義の日本でハーフの選手が国を背負うことのすごさを実感」と学生は素直にコメントした。それに対して王先生は「ハーフに対する世間の目がいつから変わり始め、その人達の日本語能力問題やアイデンティティ問題は世間でどう受け止められてきた？」と更なる考えを促した。

## 8.03課題：日本語の「曖昧さ」について。そもそも「曖昧さ」とは？日本人特有の「曖昧さ」とは？

受講生は曖昧表現の原因、具体例を様々に上げ、曖昧表現の結果は「日本人は自分の意見／本当のことを言わないという印象を外国人に与えてしまう」、「相手と腹を割って話すことができない、表面だけの関係になってしまうこともある」とコメントに書く一方、それでも日本語の曖昧さを「便利」「日本人の優しさ」として肯定的に捉え、「切磋琢磨する場やそのほか致し方ない場合を除けば、基本的に人間関係を穏便なものとしようとする心掛けは平和的で良いと思う。その裏に貸し借り、恥の概念があったとしても、結果的に見れ

ば平和だ。行動原理を読み解いたときに、決して温かく思慮深い人間ではなかったとしても、その真逆であるよりは断然良い」と、はっきりとした、少しも曖昧ではない意見を述べる。

## 8.04課題：刈間文俊先生の講演「変わる中国人の日本認識」を視聴し、外国映画・ドラマ・文学作品の中の日本人イメージを考えよう。

刈間先生の講演に対する受講生のコメントは興味深い。例えば、文化の違いについて、「私は、国際文化学部で世界の文化や宗教の違いを理解し、受け入れようと教えられていますが、先生の話を見ると、違いを受け入れれば良いのではなく、その人の人間性が最後に大きく左右するものだと感じました」と、違いを受け入れた後はどうするかを考え始めた。また、中国の「反日」問題についても、「中国人の性格が悪いのだと単純な思考をもつ前に」、日本とかかわってきた中国の歴史と現在中国の社会問題が生み出した『反日』というメカニズムを認識する必要がある」と深く省察しようとする。さらに日々変わる中国人の日本認識について、「日本人は中国に対して、政経以外で関心を抱く人はあまり見かけないが、逆に中国人は自発的に日本の文化や社会などに関心を抱いていることに驚く。日本人は中国の歴史や文化に興味を持つことで、さらに両者間の交流が活発になり、日中関係もより良い関係を築ける」と、日本社会の一員として自身の中国認識の不十分さに気づく。

受講生が挙げた海外作品の中の日本人イメージも面白い。血も涙もないような冷酷な日本人将校（「パールハーバー」）、日本人男性は侍、女性は芸者か舞子（「ラストサムライ」）、忍者（「アベンジャーズ」）、侍姿の主



人公、忍者部隊（「X-men Samurai」）、侍、ガンダム（「レディプレイヤー・ワン」）、ゲーム「ゴーストオブ ツシマ」、強いヤクザ（「ウルヴァリン SUMURAI」）、優しい警部補（「名探偵ピカチュウ」）などあり、普通の日本人が少ない。普通の日本人は登場してもやはりステレオタイプが多く、例えば着物を着ており、度の強い丸眼鏡をかけている日本人、日本特有の「侘び寂び」や「雅」を好む、騒がしいことを好まず、主人公が騒ぐとすぐに怒る短気な性格をもつ日本人であったりする（「ティファニーで朝食を」）。

受講生が挙げた映画の中に「ゲットアウト」があった。それに登場する日本人について、「白人に混ざった日本人。白人と同じ立場から意見している様子から『無意識に自分も白人側の人間だと思っている』日本人に対する皮肉が隠されているように感じた」と指摘し、「自分も含めた日本人は無意識のうちに「自分を白人側だと思っている」ところがあるのかもしれないと気付かされた」とコメントする。このコメントに対して、王先生は明治維新以来の「脱亜入欧」希望（アジアの中の西洋）、日本社会に存在する「アジア系差別」・「黒人差別」問題について思考するように促した。

#### 8.05課題：「中国から見た日本」について。中国から見た日本像の紹介より、中国人の日本観・日本の見方について意見を述べなさい。

最終回のこの課題に対する受講生の見方がなかなか鋭く、素直な関東学院大学の学生のイメージを破る迫力をもつコメントも少なくない。いくつか小見出しを付けて見てみよう。

##### \* 「模倣の文化」

「日本人が本当に一から作ったものはそこまで多くないように思う。純粹にゼロから創作したものというよりも、古代であれば、主に中国や朝鮮から、近代であれば欧米から知識を、日本風に日本人に合うように作り変えてきたのが、日本文化でもあると思う。なので、日本人は世界的な文化になったことを誇るのではなく、元となった文化に対して感謝の気持ちを忘れては行けないと思う。」

##### \* 「同族意識」

「中国から見た日本というのは、同族として、中国の分身として見る傾向があると、本日の講義を通して感じた。同族意識があるからこそ、日本の「変態」（生死観、漢字の不可解な言い回し、結婚できる、肉を食べる僧侶など）に疑問を抱くのだと思う。言い換えれば、日本は中国に依存してきたために、中国側に同族意識を芽生えさせたということだ。この依存が同族意識を中国人の中に形成し、それによって中国人が日本の独自性を見たときに、違和感を覚えたのだと思う。結論を述べると、中国から見た日本は、同族意識の元に成り立っていると思う。」この指摘に対して、中国人であ

る私は思わず身を引き締める思いである。

##### \* お互いに感じる「コンプレックス」

「中国は日本にコンプレックスを抱いているという話があったが、国同士の関係が深いからこそ成り立つ感情だと感じた。古い時代から両国の交流があるからこそ、中国は日本の発展に敏感になる節があったのだ。中国と主従関係だった日本への意識と、先進国となり技術の発展が著しい現在の日本への意識が、織り混ざり、葛藤しているのが、中国の日本の見方に大きな影響を与えている。」なかなか的確に近代以後の中国人の心理的葛藤を捉えている。

「その一方、日本も中国にコンプレックスを感じており、その理由もやはり日本人の中に古代の交流から受け継いだ中国が内在しているからだと思う。」

##### \* 実利と愛国心に基づく中国の日本観

「中国人は基本的に、自分の利益のために日本に接しているように思う。企業同士の関係性とよく似ている。中国人が古代の中国の面影を日本に探しにくるという動機からも、中国人は日本そのものよりも愛国心から来る、自国（中国）への興味が強いように思える。または単に、生活がしやすいように、彼らにとって使いやすい日本製品を重宝しているのだろう。」この指摘も中国人にとって耳が痛いのが鋭いものである。このコメントに対して、王先生は「相手のことを思う気持ちの有無」は大切なポイントだと指摘した。

以上、学生のコメントと王先生のフィードバックの一端を紹介しました。先生のフィードバックは受講生の「考えをより向上させる手助けとなった」（土橋励珠）と学生は評価しています。傍観者の私から見ても、学生同士や学生と先生がなかなか忌憚なく意見交換を行った授業のように思い、日本人以外、ベトナムルーツの学生も参加したことで、多様な視点もあったと想像できます。比較文化学科を代表する集中講義「外から見た日本」が今後も多彩な講師を迎え、学生に外の視点をもたらし刺激を与える授業となるように、努力したいと思います。学生の皆さんには、積極的な受講を期待しています。



# 受講記

現在、コロナ禍で多くの国際交流が予定変更を余儀なくされていますが、オンラインの課外講座やイベントは様々に行われています。今年の4月から5月にかけて、国際文化学部と国際センターの主催で実施された英語によるオンライン講座を受講した学生から、受講記が届きました。 (本学科教員 小滝 陽)

## フランス・リヨン2大学のオンライン講座

2年 O.K.



私がフランス・リヨンの2つの大学によるオンライン特別講座を申し込んだのは、興味本位からでした。外出自粛中の日々につまらさを感じていたタイミングであったのも、理由の一つかもしれません。英語資格の基準があったので、高校卒業前（2018年）に取得した英検2級の合格証書を探し出し、どうせならと、2つの講座・計6回の講義を申し込みました。授業以外で英語を使う機会があまりなかったので、自分なりに少し英語の勉強をしてから臨みました。

Webex という、Zoom のような Web 会議システムを利用したのですが、入室してメンバー達の名前が目に入った瞬間から、色んな国の人とこれから講義を受けるのだという実感がわきました。

また、ミュートにし忘れた韓国の方が、ルームメイトと韓国語で「これちゃんと入れてる？」「まだ始まってないよね」などという会話をしていたのを聞き取れた自分に感動しました。さらにリヨンの大学の先生がもう一人の先生と少しフランス語で会話をしているのを聞いて、みんな母国語がバラバラなのに、英語を使うことによって意思疎通ができることに改めて感動し、テンションが高まりました。

いざ始まる講義。一つ目の講座は、フランスの経済やビジネスがテーマだったのですが、経済的な用語が全く分からず、辞書と Google にかなりお世話になりました。事前に少し勉強したのはあまり意味を成しませ

んでした。日本語ですら知らない言葉を英語で知っている訳がないのです。

でも、知らなかったことを知るのが大好きな性分なので、新しい言葉をたくさん知ることができ、大満足でした。聞き取るのも少し難しい部分はあったのですが、パワーポイントの資料はアーカイブに残してもらえたので、講義の後は毎回アーカイブを見ながら単語を検索して、というのを繰り返していました。

二つ目の講座は、フランス・ドイツの過去といま、というテーマでした。私は普段、ハプスブルク家について学ぶのが好きで、ドイツに関する内容についても多少は勉強しているという状況でした。

なんと、講義の中で神聖ローマ帝国とハプスブルク家について触れたのです！ドイツの過去を語る上では外せない存在ですからね！

正直、講義中はもはや呪文のようにも聞こえていた英語が、ハプスブルク家の話になった途端にはっきりと聞き取れるようになったので、前提となる知識があるかないかでかなりリスニング力も理解力も変わるのだと身をもって体感しました。

それぞれの講座の最後の講義で、軽いテストがあったのですが、修了証をいただける程度には解けていたようです。

全体を通して難しかったと感じるのですが、難しいからこそ楽しいとも思えた講座でした。



## 自 著 紹 介

比較文化学科の富岡幸一郎先生と君塚直隆先生に、最近出版されたご著書について紹介していただきました。これを読んで興味を持った皆さんは、ぜひ現物を手に取ってみてください。

### 『危機の時代の宗教論——ヒューマニズム批判のために』 (春秋社、2021年1月刊)

本学科教員 富岡 幸一郎



本年(2021年)の1月に春秋社という出版社から出した近刊本です。3部構成で、第1部は昨年来の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大のなかで、今われわれに突きつけられている課題を、キリスト教神学(とくに宗教改革者のカルヴァンや20世紀のプロテスタント神学のカール・バルト等)から向き合い考えてみた書下ろしの文章です。

第2部は、2012年から『宗教問題』という季刊雑誌に連載してきたエッセイをまとめました。最初のものは、イスラム教スンニ派のテロ組織(自称イスラム国)が、中東地域を揺るがしている状況から、政教分離のことなどに言及しています。10年前に書いた文章ですが、アフガニスタンから米軍が撤退したりパン支配が復活したニュースを聞いて、「宗教」というものを真剣に考えなければならないと改めて思っています。

この連載では、遠藤周作の『沈黙』についての文章も入っています。比較文化学科の講義で『沈黙』についてはみなさんにも読んでもらいました。隠れキリシタンのことなど、興味を持ってくれた方も多かったようです。半世紀以上前の『沈黙』という小説が、今も21世紀の世界の様々な問題を考える上で役に立つと思います。そのほかでは、近代科学とキリスト教の神学のことなどを書きました。ヨーロッパでは、進化論とキリスト教の聖書の創造論が相矛盾するものであり、アメリカなどでも学校の教育で重要な課題となっています。さて、科学は聖書の古い神話の世界を脱して、人類に新しい啓蒙の光と技術をもたらしたものと考えられてきました。しかし、20世紀の後半から科学とキリスト教の宇宙観を、対立するものではなく融合し、お互いに支え合うような、そのような論議が深まっています。イギリスの神学者のマググラスという人は、オックスフォード大学で自然科学を学び、分子生物学の専門家です。まさに科学と神学のいずれの領域にも通じたこのような学者が改めて信仰と科学の両立について積極的な本をたくさん書いています。私のエッセイでも触れていますが、マググラスは教文館から翻訳が出ていますので、機会があれば是非読んでみて下さい。

第3部は、内村鑑三についての文章を入れました。これは2004年に日本キリスト教団出版局から刊行された『日本の説教3 内村鑑三』の解説文として書いたものですが、あ

の2001年の9月11日、アメリカの同時多発テロの衝撃をどう捉えるかという課題と交差して書きました。全体として、論文ではなくエッセイとして読みやすく書いたつもりです。それでも私の妻には「あなたの文章は難しい」と言われます。

### 『カラー版 王室外交物語—紀元前14世紀から現代まで—』 (光文社新書、2021年3月刊)

本学科教員 君塚 直隆



今年の3月にこちらの本を刊行させていただきました。のちに文庫化された本も含めます、私にとりましては21冊目の単著(著者が単独で書いた本)ということになります。

これまで私はイギリスを中心としたヨーロッパの政治や外交についての研究を進めるとともに、世界中の君主制についても探究して参りました。今回の本書はそれが融合されたものですね。そもそも「外交」とは、お互いを対等の関係と認め合う王侯同士のつきあいから始まりました。それが今から3500年ほど前の紀元前14世紀の中東世界でのことです。古代エジプトやヒッタイト、アッシリアといった王国の王たちがお互いに姻戚関係で結ばれたり、贈り物を交換したりということが、古代のアッカド語(詳しくは高井先生に訊いてみてくださいね!)で記された粘土板に残っています。世界最古の外交文書ですね。

これ以降、アジア各地ではオスマンやペルシャ、ムガル(インド)や明清の中華など「帝国」が君臨する時代には、自分が上で相手が下というお互いを対等とは認め合わない風潮が主流となり、小国がひしめき合っていたヨーロッパで「外交」は発展していきます。中世にはラテン語(古代ローマ帝国の言語)、17世紀末ぐらいからはフランス語を共通の国際言語としてお互いに常駐の大使や大使館を派遣しあい、こんにちにも続く「外交」の慣例やルールが生み出されていきました。それを主導したのも各国の王侯たちでした。

しかし、20世紀の2度の世界大戦を経て、王侯たちは政治や外交の表舞台からは姿を消していきますが、21世紀の現在でもイギリスのエリザベス2世女王や日本の皇室などが、政府やプロの外交官たちが担うハードの外交とは別の次元の「ソフトの外交」を展開し、国際親善に積極的に関わっているのです。

「外交」という人類の歴史とともに生まれ、発展を遂げてきた現象を読み解いていく上で、本書に少しでも触れていただくと幸甚です。

## お勧め の ドラマ

映画研究がご専門の碓井みちこ先生にお勧めのドラマをご紹介します。ステイホームで自宅にいる時間も長くなりがちですが、そんなとき家で良質なドラマを観るのはどうでしょう。

本学科教員 碓井 みちこ

以前は、映画館によく出掛けていましたが、ここ1年半ほど、ステイホームを心がけていることもあり、Netflix、Amazon Prime Videoで映画やドラマを観る機会が格段に増えました。最近、Amazon Prime Videoで、『トワイライト・ゾーン』(The Twilight Zone, 2019-20)という、アメリカで製作されたドラマ・シリーズを鑑賞しました。登場人物が、現実と幻想が混在した世界で奇妙な体験をする、1話完結型のSFドラマです。1959から64年にかけて計156話も製作された同名のオリジナル版が、当時絶大な人気を博し、その後も、様々な作り手たちがテレビドラマや映画でリメイクしてきました。同時代の社会情勢を積極的に取り入れて、物語などを大幅に作り直す場合は、リメイクより、リブート(再始動)と呼ぶほうが近年は好まれており、最新のリメイクとなるこのドラマ・シリーズも、リブート版と銘打たれています。

ファースト・シーズンは全10話ありますが、そのうち、第3話「巻き戻し」(Replay)が、「BLM運動なくしては生まれなかったエピソード」(公式サイトより)で、特にお勧めです。主人公が、何度も過去に戻り、すでに経験したのとは別の未来を手に入れようとするのは、SFでは極めてよくある設定なのですが、その設定をここでは、母親が何度やり直しても、自分と息子に目をつけて不当に追及する白人警官から逃れられないという物語に落とし込んでいます。演出も素晴らしく、特に、過去に戻るたびに、ダイナー(アメリカ式のレストラン)の内部が何度も映るのですが、その見せ方が、毎回工夫されていて、同じ場所なのに主人公にとっての意味がその都度違っているというのが非常に良く分かるものになっています。興味を持った方は、本編

を是非観てください!なお、このドラマ・シリーズでは、人種差別の問題に鋭く切り込み、大きな話題となったホラー映画『ゲット・アウト』(Get Out, 2017)で監督デビューしたジョーダン・ピールが、製作総指揮をつとめており、各話のナレーター(語り手としてカメオ出演)も担当しています。

ちなみに、私は、現在、オリジナル版『トワイライト・ゾーン』を少しずつ、日本語字幕なしで(英語字幕の助けは借りていますが)鑑賞しています。オリジナル版も、何度もリメイク・リブートされるだけあって、本当によくできています。しかも毎話、約25分で必ず終わり、ダラダラしたところが一切ないので、アメリカの映画・ドラマ史や文化史を本格的に学びたい方はもちろん、ドラマや映画で英語を学習したいという方も、飽きずに見続けられるのではないかと思います。オリジナル版は、残念ながら、日本のAmazon Prime Videoでは配信されておらず、私はUS版ブルーレイで鑑賞しています。

参考:

海外TVドラマ『トワイライト・ゾーン』  
公式サイト | パラマウント  
<https://paramount.jp/twilight-zone/>

